

私版・日文研創世記

埴原和郎

それは天城山から始まった。一九八一（昭和五十六）年十月のことである。

IBMの天城シンポジウム〈日本文化の明暗〉に招待を受けて出席したとき、私ははじめて梅原猛氏という高名な哲学者にお目にかかったのだが、これが日文研とのえにしの発端になるうとは、そのときの私が夢想もしなかったことである。

このシンポジウムに私を誘って下さったのは、江上波夫先生だった。お茶の水の〈山の上ホテル〉の一室だったと記憶する。私はまず質問した。

「日本文化の明暗とはどういう意味ですか」

江上先生の答は

「日本文化で日の当たる部分と日陰の部分です」

という、禅問答じみた一言だった。正直にいうが、江上先生と話していると、しばしば迷路をさまよっているような気持ちになることがある。このときも同じで、シンポジウムのねらいを

私なりに理解しなければならなかった。

私の専門は自然人類学で、ひごろ骨や歯を相手にしている。だから日本文化に直接アプローチするわけにはいかない。そこで、当時関心をもっていた〈アイヌの起源〉という問題が頭をかすめた。

アイヌの人種の起源は、ある意味では明治らしい華々しい論争の存在だった。しかし日本人研究という視点にたつと、それは陰の存在だったように思える。なぜなら、アイヌは日本人とは別人種という一種の固定観念があつて、日本人論の中で正面から取り上げられることがほとんどなかったからである。

「それでは、〈日本人の中のアイヌの位置づけ〉というようなテーマではいかがでしょうか」

という、江上先生は

「そうそう、人類学者がアイヌをどう考えているか、それを聞きたい」

と乗り出してこられた。

紅葉にはまだ早かったが、十月の天城山は清涼な空気につつまれ、清潔なIBMの天城ホームステッドはシンポジウムにうつつつけの環境だった。ただし、朝寝坊の私にとってつらかったことは、午前七時になるとNHKニュースでたまたぎ起こされることだった。これは、自分でスイッチを切ることができない仕組みになっている。優雅とはいえ、やはりここはきびしい修行の場だったのである。

シンポジウムの参加者は江上先生をはじめ梅原猛、上山春平、中根千枝、国分直一、福永光司、外間守善、森浩一（順不同）などの有名な学者で、私はいささか緊張せざるをえなかった。

このとき、梅原氏はアイヌ語をとりあげ、日本文化の基層を解く鍵がアイヌ文化に潜んでいるのではないか、という問題提起をされた。そのあとを私が受け、アイヌは白人系でもオーストラリア系でもなく、まさに縄文系の集団であり、その意味で非アイヌ系日本人（和人）と同根である、という主旨の話をした。

偶然だが、梅原氏のテーマは、私が半ば苦しまぎれに選んだアイヌという主題に一致するばかりでなく、氏の主張もまた、その基本的な点で私の考えと見事に一致したのである。

三日間にわたるシンポジウムの最終日に、梅原氏から私への提案があった。

「近いうちに先生と対談して、それを本にしませんか」

日本文化の深層にかかわる多くの話を聞き、かなり興奮していた私は二つ返事で賛成した。

「ぜひお願いします。私も先生のお話をもっと伺いたいと思います」

梅原氏のたくましい行動力によって、この話が急速に実現することになった。帰京後間もなく

「梅原先生との対談をお願いします」

という小学館の連絡を受け、私はその素早さに驚いたものである。一九八二年一月七日から、梅原氏と私は東京のホテル・オークラに泊り込んで二日間にわたって喋り続け、それが「アイヌは原日本人か」という本になって出版された。一九八二年十月のことで、天城シンポジウムからちょうど一年目である。

その序文のなかで、梅原氏は次のように述べている。

「今回の対談は、私が参加した対談としては、まことに珍しい対談である。なぜなら、そこで私は、ほぼ完全に聞き役に徹しているからである。したがって、発言の量は埴原氏六に対して私は四、内容的にいえば、埴原氏七にたいして私は三なのである」

たしかに、梅原氏としては珍しく、この対談では聞き役にまわってくださった。そして私にとって、これは予想外の大きなステップとなったのである。

アイヌ研究というと、私には忘れられない思い出がある。一九六六年八月、札幌で北方民族に関する日米人類学会議が開か

れた。私はアイヌ研究に着手したばかりだったが、十九世紀らしいの（アイヌは白人系人種）という根強い説に大きな疑問を抱いていた。そこで、私のささやかな歯の研究を紹介したあと、ひとこと余計なことを喋ってしまった。

「皆さんにくばられている旅行社の案内にアイヌは白人だと書いてあるが、これは一部の学者がいつていることで、十分に証明されているわけではない」

案の定、出席していた児玉作左衛門氏（北海道大学名誉教授、解剖学）から猛烈な反対の声があがった。児玉氏は有名なアイヌ白人論者である。

「私はたくさんのアイヌと会い、長年にわたって研究を続けてきた。だからアイヌが白人だという私の目に狂いはない。埴原君のいうことは机上の空論だ」

私は、へよそものはだまっておれ」といわんばかりの児玉氏の言葉で、かえってアイヌ白人説は印象論だという感を強くしたのである。

私がアイヌの研究をはじめたのは一九六五年ころだった。だが、アイヌ研究は江戸時代末期から内外の多数の学者が取り組んだ問題である。それを向こうにまわして切り込むには、よほど強固な証明力がなくてはならない。

私が権威ある児玉氏に食いついたのは若気のいたりとしかないようがないが、いずれにせよ、アイヌの起源については納得のいく研究が必要だと思っていた。

ちょうどそのころ、IBP（国際生物学研究計画）が動きだし、その一部としてアイヌ研究班が組織された。私もそれに参加することになり、本格的にアイヌ研究に取り組む機会をえた。アイヌ研究班には尾本恵市氏（現・東京大学教授、人類遺伝学）や三沢章吾氏（現・筑波大学教授、法医学）も加わり、以後数年にわたって三人組の調査が続いた。

その結果、歯や骨ばかりでなく、血液型を含む種々の遺伝形質でも、アイヌがアジア系人種（モンゴロイド）であり、とくに和人にもっとも近いことが証明された。つまり、アイヌが白人系だという根拠は否定されたことになる。この点で、私は尾本・三沢両氏の研究に負うところが大きい。

しかし私は、この結果をすぐに「アイヌ起源論」という大問題に結びつけることをはばかり、とりあえずデータ分析の結果のみを報告した。それは、形態学にせよ遺伝学にせよ、私どもの研究が一部の身体形質にとどまり、文化をも含めた集団の起源を論ずるまでに深化されていなかったからである。

とはいえ、この研究はアイヌ白人説に対する私の疑問をぬぐい去るものだった。私はその後もさまざまなデータ分析を続け、アイヌが縄文人の系統であることも確かめた。これは、アイヌと和人が同じルーツをもつことを意味する。このようにして、私は徐々に自信を深めてきたのだが、尾本・三沢両氏の研究もその精密さを増してきた。

天城シンポジウム「日本文化の明暗」が開催されたのは、ま

きに私の頭の中でアイヌ起源のシナリオが形をなしてきたときだったのである。そして梅原氏との対談……。私としては、かなり勇気のいる発言だったが、同時に「そろそろ公表の時期だろう」という責任感もあった。

「アイヌは原日本人か」という本のあとがきに、私は次のように書いた。

「……今後は自然人類学のみならず、考古学・歴史学・民族学・言語学・地理学など、多くの分野の方々のご協力をえて、さらに包括的な研究が行なわれることを私は切に願うものであり、本書がもしそのための捨て石ともなれば、私にとって望外の喜びである」

これは、その時の私の率直な希望だったが、どのように実現するか、という具体的な方策はまったくなかったのである。しかし天城シンポジウムに刺激された私は、自分のできる範囲で文科系の学者との交流を深めようと思った。そこで、たまに話があつた朝日カルチャー・センターの講座を利用して、さまざまな方に講師をお願いした。人類学はいうまでもなく、考古学、歴史学、民族学、言語学、地理学などなど。多忙の梅原氏、上山春平氏、佐々木高明氏にもお願いして、わざわざ東京まで出張願った。今にして思えば、よく私のお願いを聞いて下さったものだと言汗がでる。

しかしおかげで、『日本人はどこからきたか』、『縄文人の知恵』、『日本人の起源』（いずれも小学館創造選書）という三冊の

本を出版することができた。そのとき、自分はずくづく幸せな男だと思った。ところが、さらに大きな幸運がやってきた。日文研創設の話である。

話は多少前後するが、

「日本文化に関する新しい研究所を設立するための準備委員会にご参加ください」

という話が京都市から舞い込んだのは、一九八二年の春だったと記憶する。梅原氏からすでにその構想は伺っていたものの、この時代に実現はむずかしいだろうと思っていたのである。しかしこの話を受けて思いだしたのは、いち早く対談の話を具体化した梅原氏の行動力である。しかも、京都市が肝入りとなつて開く委員会の座長は桑原武夫先生だという。私は、へもしかすると面白いことになるかも……という気持ちで参加することにした。

当時の手帳を見ると、五月二十二日（土）の欄に

「京都市・新研究所関係。ホテル・フジタ しらさぎの間」

と記入してある。おそらく、これが委員会への私の初参加の日だったと思われる。ちょうど東大の五月祭の日だった。

私は、以前に桑原先生にお目にかかったことがある。私がまだ札幌医科大学にいたころ、北海道銀行が主催して「大学のありかた」に関する討論会を開いたことがある。まだ大学紛争が起っていない時期である。どういう理由かは知らないが、私は北海道大学などの教授たちに混じって、札幌医科大学から一

人だけ参加することになった。

この討論会は〈桑原武夫先生を囲む会〉という雰囲気で行った。

「ちかごろ駅弁大学などという言葉がはやっとりますが、大学がたくさんできることは悪いことやおまへん」

といわれた桑原先生の言葉が印象に残っている。

私も何か発言したのだが、その内容は覚えていない。たぶん、アメリカと日本の大学を比較しながら、学問の自由について何かを喋ったのではないかと思われる。しかし京都で再びお目にかかったとき、桑原先生には私の記憶などなかったにちがいない。私もはじめてお目にかかったように振舞うことにした。

私の予想どおり、研究所設立の準備委員会は精力的な活動を始めた。最初は二カ月に一度程度だったのが毎月になり、隔週に開かれることもあった。私は東京大学での仕事もかなり忙しかったので、京都の会議のときはほとんど日帰りしていた。料亭でご馳走になるときも、途中で失礼することが多かった。

ある日

「私はこれで失礼します」

といって席を立ったら、桑原先生が

「埴原はん。京都の夜はおもしろうおまつせ。一度ゆっくりしていきなはれ」

といわれた。そこで次回から一泊することにしたのだが、これが私にとって一種の麻薬となってしまうた。

祇園での思い出を一つだけ披露させていたきたい。

ある春の宵だった。夕食のあとお茶屋で飲み、よい気分になって白川のほとりに出た。けだるい春の風に満開のしだれ桜がわずかにゆれ、見上げると、中天におぼろ月がかかっている。まさに吉井勇の世界である。夢の中にいるようなその景色をみて

「ああ、これこそ京都」

とため息をついた。とたんに横にいた芳賀徹氏が大声で

「えー？ なに？」

これで、せっかくの気分が一度にぶちこわされてしまった。

その後、京都の委員会はあれよあれよという早さで進んだ。

準備委員会を蔭で支えてくれた通称〈あの会〉(ANO会)若手のシンクタンク。Anti-nationalism organizationの略だという説もある。京大人文研の横山俊夫氏、日文研の山田慶児氏、白幡洋三郎氏、井上章一氏などがメンバー)の活動もすさまじかった。私も山田慶児氏や芳賀徹氏とともに東京のホテルに泊り込み、研究部の構成や研究体制について、夜を徹して話しあったこともある。

当時の私たちは、なにかにとりつかれたような感じでもあった。やがて、文部省の科学研究費補助金によって日本文化研究の具体策を検討するまでに漕ぎつけ、その一環として奄美大島の現地調査も実施された。さらにこの延長として一九八六年に与論島の人類学的・考古学的調査を行なったが、このときは長

崎大学医学部の内藤芳篤教授および鹿児島大学法文学部の上村俊雄教授らのご協力を得たことを、日文研創設にまつわるエピソードとしてつけ加えておく。

一九八四年には、国立民族学博物館の事業として「日本文化研究に関する調査研究」が実施され、翌八五年、私どもは手わけして外国にでかけた。これは、諸外国における日本研究の実態調査を行なうとともに、多くの日本研究者に接触して意見を聞くためである。私の分担はアメリカとカナダで、三週間に七つの大学・研究機関の十一研究室を訪ねた。それ以後のなりゆきは、日文研の「正史」に述べるとおりである。

一九八六年四月五日、文部省に「国際日本文化研究センター（仮称）創設準備室」が置かれ、梅原氏と園田英弘氏が乗り込んできた。文部省の屋上に仮設された狭い一室である。両氏のほかに事務官の黒田英雄、山下孝、津村和孝の三氏が、この狭い部屋で窮屈そうに仕事をしていた。

私は文部省の委員会に出席したときなどに準備室を訪れたが、東大の部屋に呼び出しの電話がかかることも少なくなかった。

考えてみれば、私をはじめ梅原氏にお目にかかってから五年半、京都の委員会に出るようになってから四年たらずである。信じられないようなスピードだが、同時に、ここまでの道が長かったような気がする。準備委員会に加わっただけの私でさえそうなのだから、中心となって活躍された桑原・梅原両氏にとってはなおさらだろう。私は、いわゆる京都学派の底力をみせ

つけられたように思った。

いつだったか、正確な日は覚えていない。私が準備室に行ったとき、梅原氏から日文研の教授に就任することを要請された。この研究センターが私の理想に近いものであり、私自身が大きな興味をもち、さらに多少なりとも準備に参加したということもあって、これは私にとってたいへんありがたい話だった。しかし東京大学での私の定年は一九八八年三月であり、日文研が創設されるのはその一年前となる公算が大きい。

「東大の定年まで、一年待っていただけないでしょうか」とお願いしたのだが、そのときの梅原氏の言葉はきびしいものだった。

「この研究センターに定年教授はいらない。現職の教授にきていただきたいのです」

私は、自分勝手な申し出を恥じた。教官採用に際しては、当然それだけのきびしさが要求される。単なる再就職先という甘いことを考える教官を拒否するのは、まことに立派な見識である。私はすぐに答えた。

「わかりました。しかし学生指導の責任もありますので、一年間は東京大学併任ということにしていた方がいいのです」

日文研の「定年教官を採用しない」という基本方針は、このときの梅原氏と私のやりとりで端を発する。

創設予算通過の公算が大きくなったころ、準備室を訪れた私は梅原氏らと昼食をとることにした。文部省から谷間のような

道を通って霞が関ビルに行く途中、日文研の初代庶務課長になった黒田氏が

「先生には研究調整主幹に就任していただきたいと思っ
ています」

といった。

「研究調整主幹でなんのこと？」

私が聞くと

「大学の学部長のようなものです」

という。そのとき、私は実感のともなわなままに

「ふーん、いいですよ」

といったのだが、これがあとでいろいろな苦勞の種となり、今にして思えば、私のよい修行の機会ともなった。だが、それはあとの話である。

一九八七年五月二十一日、日文研は京都市の西郊、洛西ニュータウンの洛西センタービルで呱呱の声をあげた。狭いながらも希望に満ちた船出だった。開所記念コンパの会場は、阪急・桂駅前のおたやんである。私個人についていえば、この日に〈国際日本文化研究センター教授研究部に配置替え〉、〈国際日本文化研究センター研究調整主幹兼任〉、さらに〈東京大学教授理学部兼任〉というややこしいことになった。

私は研究調整主幹として、当然、毎週の会議に出席しなければならぬ。日文研と東京大学とのかけもちが始まった。

会議は朝十時半に始まる。それに間に合うためには、東京発

午前七時の新幹線に乗らなければならない。あいかわらず朝寝坊の私にとっては、それこそ死ぬ思いだった。だが夏はまだいい。秋もふけ、日が短くなるにつれて、〈死ぬ思い〉が〈自殺願望〉にかわった。目覚し時計で起きると、そとはまだ真っ暗である。部屋は寒い。〈こんな苦勞までして、どうして働かねばならないのか。いっそ死んだほうが楽だ〉と思う。やっと新幹線に乗る。車内販売のコーヒーとサンドウィッチで黙々と朝食をとる。そのわびしさはいいようもない。〈女房はまだヌクヌクと寝ているのだろう〉と思うと余計に腹が立つ。

しかし私の気楽さは、起床後二時間くらいつと元気がでることである。決して低血圧症ではない。むしろ血圧は高い方である。朝のつらさは、私独特の生活スタイルによるもので、誰をうらむこともできない。だから、京都につくころには元気いっぱいである。

さらに、このつらさを吹き飛ばしてくれる助っ人があらわれた。最初の一年間は家内が東京にいたので、京都にきたときは一人住まいである。夕食を一人でとるのは本当にわびしいものだ。そこで日文研の女性職員たちをさそったところ、彼女たちは快く応じてくれた。当時の女性陣は七人で、若く美しい彼女たちと夕食をとることは、京都での大きな楽しみとなった。やがて、自然発生的に〈ハニーの会〉という名が生まれ、日文研でかくれもないサロンになってしまった。以下は、黒田庶務課長（当時は総務課長）の感想である。

「創設されたばかりの日文研では、研究部と管理部との交流が大切です。だから先生のハニーの会は、たいへん結構なことと思っています」

それほど期待されるようなシロモノではないが、以後、私は安心して、また《日文研のために》ハニーの会を開催した。私の京都生活に潤いを与えてくれた七人の女性と、この会の存在意義を公認してくれた黒田氏には、今でも深く感謝している次第である。

私は、いよいよ共同研究の準備にとりかかった。これこそ、私が熱望した研究方式である。しかし、日文研は日本文化の研究を表看板にしているので、研究課題もそれにふさわしいものにした。私はかなり考えたあげく、《日本文化の基本構造とその自然的背景》とした。

この題は、江上波夫先生流の禅問答スタイルかもしれない。しかし、私のねらいが日本文化と日本人の構造解析であり、また文系・理系の学際研究であることから、このネイミングは気に入っている。

それは、日文研共同研究第一号として一九八七年十一月にスタートした。参加していただいたのは、日本の第一線で活躍する二十名余りの研究者で、その専門は歴史学、考古学、民族学、民俗学、言語学、仏教美術史、人類遺伝学、解剖学、家畜学、動物遺伝学、ウィルス学、環境学など、まさに多彩である。

五年前、《アイヌは原日本人か》という本のあとがきに書いた

私の願望が、いまここに実現したのである。私にとっては、単なる夢が正夢となり、広い視野に立つ日本人・日本文化研究が現実になったのである。毎週の東京―京都往復や早起きのつらさもなんのその、である。

第一回共同研究会の光景を、私は忘れることができない。ラウンド・テーブルに多くの参加研究者が着席し、部屋の一隅では研究協力課の事務官と女性の補佐職員がマイクとテープレコーダーを調整してスタンバイしている。みようによってはものしく、また力強くもある。私は立って開会のあいさつをしたのだが、何をいったか覚えていない。たぶん、来し方行く末を考えて、かなり緊張していたのだろう。

「共同研究にはいろいろな方式がある。たとえば桑原方式、今西方式など……」

というのは梅原氏の持論である。私はこの共同研究で、前から考えていた《仮説攻撃型》の方式をとった。

これは、まず代表者である私が一つの仮説を提示し、それに向かって多様な分野から攻撃をせよという方式である。攻撃はつまり批判である。また仮説に同意できる点があれば、それぞれの分野から証拠をあげ、同意の理由を明らかにせよという。

このようにすれば仮説の弱点も指摘されるし、同時に、より広い範囲からの補強も期待される。さらに、往々にして発散しがちな議論を収斂に向かわせる効果もあるだろう。これこそ、

私が日本人・日本文化の共同研究に託した夢にほかならない。

私が第一回共同研究会で提示したのは、あとで「二重構造モデル」と名づけた日本人の形成に関する仮説だった。

一九九〇年の国際シンポジウムでも、私は同じ方式を採用した。そして、このときにはじめて、私の仮説を二重構造モデル (dual structure model) と名づけて正式に公表した。アイヌ研究に着手してから、すでに二十年余がたっている。

自画自賛ながら、この共同研究方式は成功したように思う。国際シンポジウムを含めて、議論はかなりよい収斂性をみせ、また二重構造モデルの有効性ととも、問題点もはっきりしてきた。ここから、再び新しい研究が始まり、より精密なモデルが構築されることを期待したい。仮説は、壊されるために存在するのである。

さて……。

天城シンポジウムから十一年、日文研の創設から五年半。私にとって、この期間は好運の連続であり、私の日本人研究にとっては充実の日々であった。ふりかえってみると、私の日本人研究に拍車がかかったのは、天城シンポジウムを契機とするような気がする。

シンポジウム後に文部省科学研究費補助金の代表者として行なった研究だけをあげても、一九八三―八四年の福島県三貫地貝塚出土人骨の人類学的研究、八四年の第一次から九〇年の第五次にいたる太平洋民族骨格の海外調査、八五―八七年の奄美

諸島における日本基層文化とその変容に関する総合的研究、八五―八八年の現代日本人頭骨の地理的変異に関する総合的研究、八六―八七年の日本古代人骨のデータベース構築と統計学的分析などがある。われながらずいぶん張り切ったものだと思うが、これも天城シンポジウムで注入されたカンフル剤のおかげだろう。

一九八八年三月十八日、私は「人類学と関連諸科学との接点」と題して、東京大学の最終講義を行なった。これはもちろん、日文研で開始したばかりの共同研究を意識したものである。遠く関西方面からも多くの方に出席していただいたが、最終講義としては珍しく公開講座の形式をとったので、一般の方の聴講も多かった。私は最後に

「私は今後、京都の国際日本文化研究センターで研究を続けま

す。京都に行くからには、鳥辺山の土となる覚悟です」といって締めくくった。ところが、これが締まらなかったのである。出席しておられた奈良国立文化財研究所の佐原真氏が私の間違いを指摘された。

「先生。鳥辺山の「土」ではなくて、鳥辺山の「煙」ですよ」私は、日本文化の教養のなさにつくづく情けなくなった。

私はまもなく、二度目の定年を迎えようとしている。教養のなさ朝寝坊は相変わらずだが、この充実した十年間を私に与えて下さった故桑原武夫先生、梅原猛所長をはじめ、日文研の創設にたずさわったすべての方々と、共同研究に参加してくだ

さった研究者の皆さんに深い感謝の意を捧げる。同時に、ときどきカンシヤク玉を破裂させた私を暖かく支えてくださった日文研の教官、事務官の諸氏には、おわびとともに、心からのお礼を申し上げる次第である。

この五年余にわたる京都生活のおかげで、私は日文研の外でもさまざまな方の知遇をえた。人のえにしの不思議さで、私の京都住まいは今後も続きそうである。東大の最終講義で宣言したとおり、私は、やはり鳥辺山の煙と化すべく運命づけられているような気がする。

(一九九二年十月一日記)